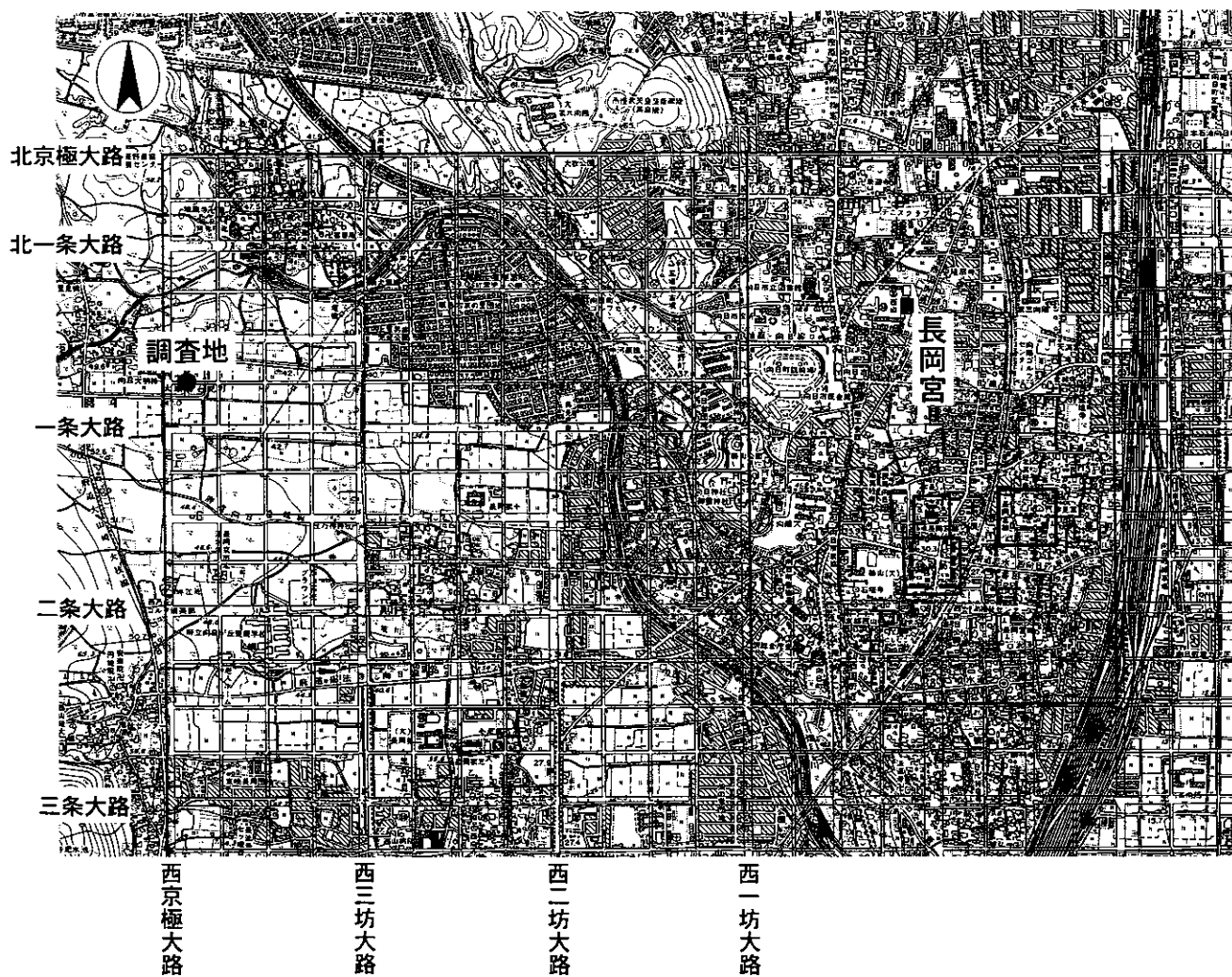


# 長岡京右京一条四坊十三・十四町 現地説明会資料



2003年2月1日

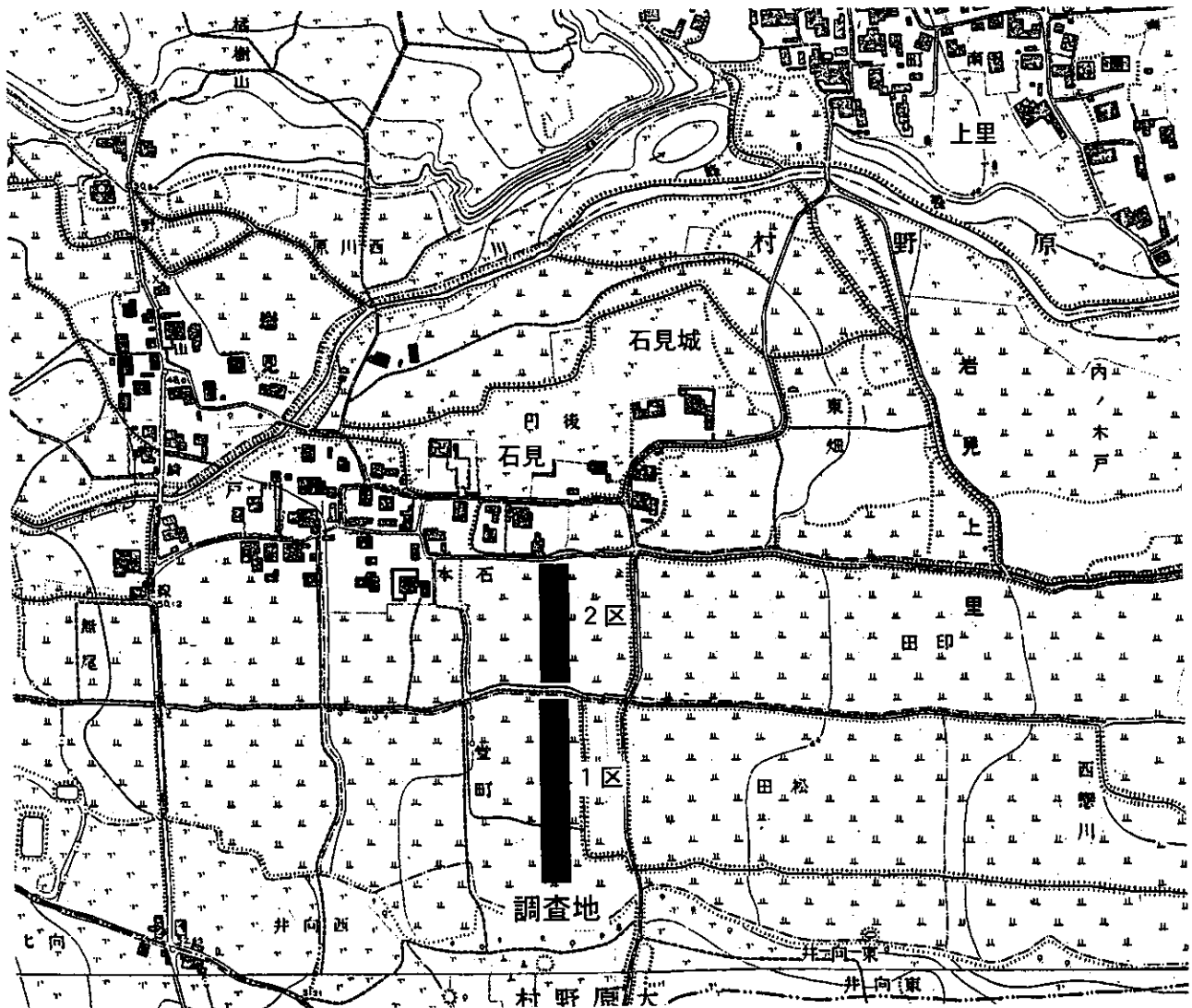
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

## 調査の経過と周辺の遺跡群

今回の調査は、京都市建設局街路部街路建設課による、中山石見線建設に伴う事前調査として実施している。調査地は京都市西京区大原野石見町内に位置し、関係する遺跡には長岡京右京一条四坊十三・十四町、芝古墳群などがあり、付近には石見城跡、大原野石見町遺跡もある。2001年11月から2002年3月にかけて試掘調査を行い、2002年8月からは発掘調査を実施している。

調査区は石見地区を東西に走る道路を境に、南側を1区、北側を2区として実施している。1区では、縄文時代後期から弥生時代前期の流路・湿地帯、柱穴、古墳時代前期の流路、中世の耕作溝や畦など各時代の遺構・遺物を発見している。今回の現地説明会は2区の調査成果を中心に開催することにした。なお、関連する調査として、伏見向日町線の調査を2003年1月から南東部の隣接地で実施している。

調査地の周囲には水田が広がっているが、東方には長岡宮跡が所在する向日丘陵が間近に見える。西方には善峰寺がある西山が南北に峰を連ね、西北には老ノ坂峠や愛宕山を望むことができる。また、南方には孟宗竹が繁茂する低丘陵があり、光明寺や長岡京市市街地への視界を遮っている。



調査地周辺の景観（都市計画図、大正11年作成、1：5000）

## 平安時代後期から鎌倉時代・長岡京期の主な遺構群

弥生時代から近世までの遺構・遺物を確認しているが、ここでは調査が終わった平安時代後期から鎌倉時代（中世）と長岡京期の遺構・遺物を中心に報告する。

**平安時代後期から鎌倉時代の遺構** 検出した遺構には、掘立柱建物・柵列、土塋、土塋墓などがある。

**建物1** 東西4間、南北3間以上で、南西のコーナー部を確認した。柱間は2.0~3.0mで一定しない。建物南東部には三角形の土塋があり、建物の東・南辺側柱の内側に位置している。

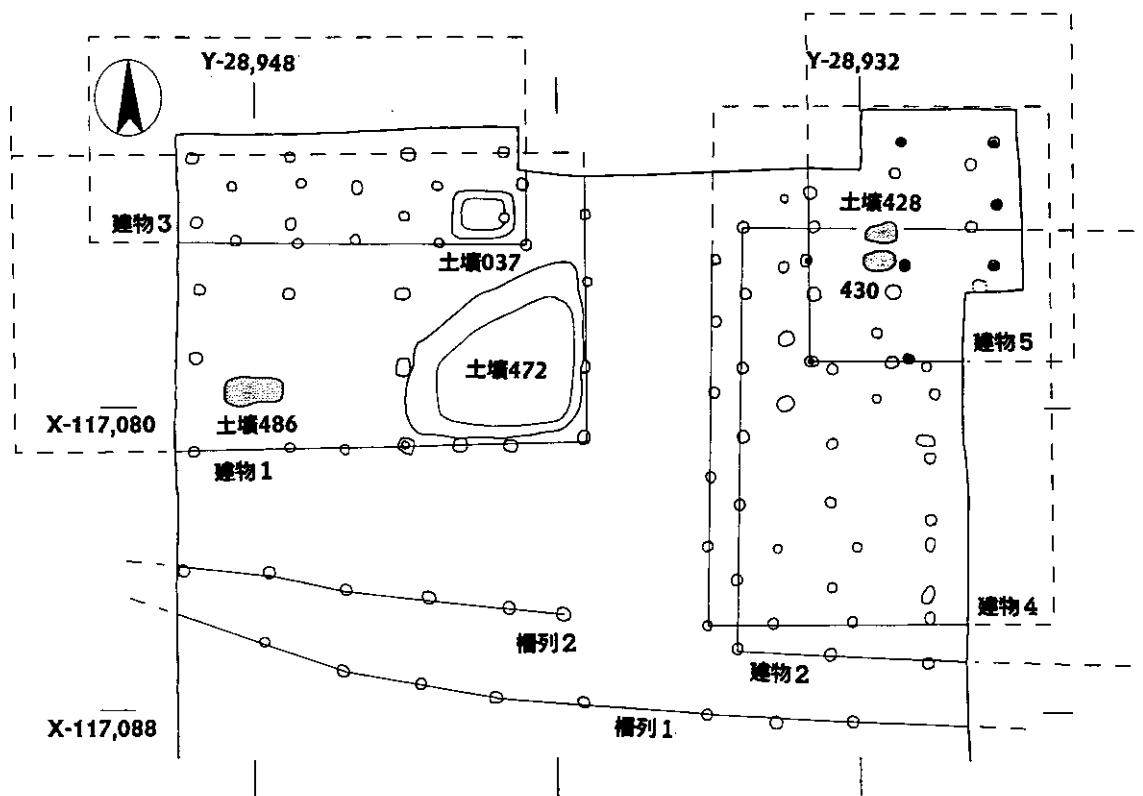
**建物2** 東西2間以上、南北6間で、柱間は1.8~2.5mとそろわない。側柱筋の交点に柱を建てる総柱建物と考えられる。

**建物3** 建物1・2の後に作られた建物で、建物1とほぼ重なるが、規模は東西4間、南北1間以上に復元できる。柱間は1.5~2.3mになる。これも総柱建物である。

**建物4** 建物2と重なる位置に作られている。規模は東西3間以上、南北5間以上、柱間は1.6~2.1m前後である。建物1~3と同じく側柱の交点に必ずしも柱は据えないが、総柱建物に復元される。掘形の底に根石を据えた建物で、東西南北ともに2間以上に復元される。柱間は2.5m前後である。

**柵列1** 建物群の南を限る柵列で北西から南東に伸び、建物とは平行しない。柱間は1.7~3.2mほどあり、建物と同じくそろわない。

**柵列2** 柵列1の北側に位置する柵列で、東端は建物4の南側柱列にそろえている。



中世遺構実測図 (1:200)

土壌472 ほぼ2等辺三角形をした土壌で、建物1の南東隅に位置する。東辺と南辺の建物側柱側では4.5mあり、建物内部の一边は6mほどある。側柱側はほぼ垂直に掘り下げているが、建物内部の一边は緩やかに傾斜している。堆積土は大きく2層に分かれ、上層は人頭大の礫が20個前後出土し、下層は灰色泥砂層が薄く張られ、その下は小礫で固められていた。鎌倉時代前期の瓦器を中心とする遺物が比較的多く出土している。機能としては、倉庫や馬小屋などが想定されるが、決め手を欠いている。

土壌037 正方形に近い、1.6×1.2mの大きさをした土壌で、北西部に瓦器椀が正位置で据えられていた。また、埋土からも多くの瓦器椀片が出土した。土壌墓とすると棺内の堆積土層がほとんどないが、ここでは規模や遺物の状況から土壌墓としておく。

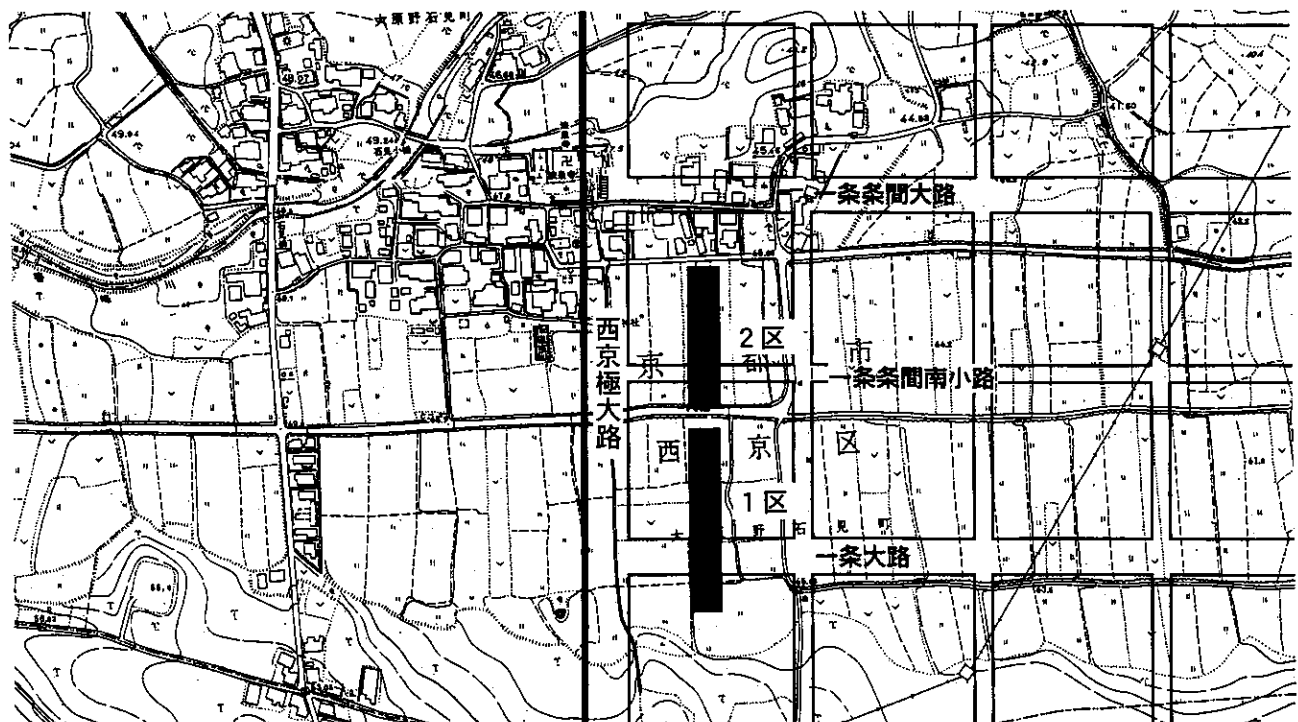
土壌486 東西に長辺がある1.7×0.8mの土壌で、穴を掘った後に薄く炭をばらまき、その上に径20cmほどの平らな石を27個使い平坦に敷き詰めている。敷石には熱で焦げた痕跡があり、内部で火が焚かれたと思われるが、掘形の大半は焼け焦げていない。同様の形態・規模をした土壌(土壌428・430)が、トレンチの北東部に並んでいる。12世紀の遺物が少量出土した。

建物や柵列は2時期の変遷がある。建物1・2・柵列1が最初に作られ、建物3・4・柵列2は先の建物が使用されなくなった後に作られたと考えている。

長岡京期の遺構 道路側溝・溝・土壌・柵列などを発見したが、建物は検出していない。

溝532 一条条間南小路の南側溝で、幅は1.8m前後、深さは0.5mほどある。北肩には段があり、当初幅が狭く浅い溝を掘り、後に南に拡張し、本格的に深く掘ったことがわかる。埋土は上層と下層に別れ、上層は溝を埋め戻した土層、下層は灰色泥砂層で溜水や流水痕跡をもつ。底には溝掘削時の礫を投げ込んだのか、10cm前後の礫や小礫が集まる部分がある。下層からの出土遺物は少ないが、土馬の破片が底から出土した。

溝533 一条条間南小路北側溝。最終形態は2m前後の幅であるが、当初は調査区中央の6.5m



調査地周辺の条坊復元図 (1 : 5000)

ほどが道路側に広がり幅3.2mほどある。この広がりに対応して深さも異なり、狭い部分では0.2mほど、広い部分では0.4mほどある。底には南側溝と同様に石が放りこまれている部分もある。南側溝と比べ、幅や深さに出入りがあり、整然とは掘られていない。

南側溝の座標は、Y-28,936.0m地点で、X-117,151.9mが溝心、北溝の座標は同一地点で、X-117,143.5mが溝心である。したがって両側溝の溝心々間は8.6mほどになる。

**溝552・553** 平行する溝で間隔は、溝の中心で8m前後ある。

**土壙563** 長辺11.5m、短辺4.0mの溝状土壙で、土師器や須恵器などの食器と、土馬・ミニチュア甕などの祭祀遺物が出土した。土馬は破片で出土したが、接合できるものもある。

**溝543** 一条条間南小路の北側溝に流れ込む南北溝、幅は2m前後で一定であるが、深さは場所によって異なる、北隅と南端で遺物が多量に出土した。

**柵列** 土壙563の南に径0.5mの柱穴が3基並ぶ。柱間は1m前後であった。

## まとめ

大規模な調査により、縄文時代後期から近代に至る長期間の各種の遺構・遺物が発見され、多くの成果をあげているが、ここでは中世と長岡京期の遺構を中心に、主なものをあげておく。

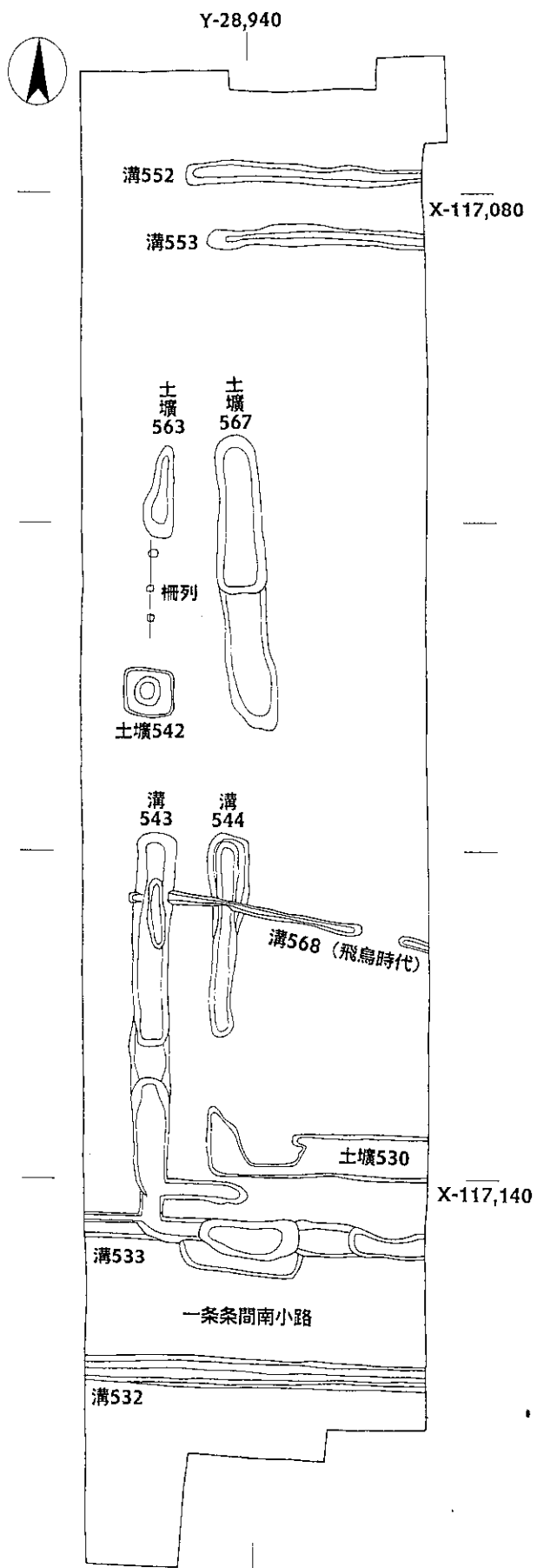
**平安時代後期から鎌倉時代** 遺構の大半は平安時代後期から鎌倉時代前期で、歴年代では12世紀から13世紀代にあたる。土壙037が土壙墓とすると建物群との関係が問題となる。出土遺物でみると土壙と建物の年代はほぼ重なることが判り、集落内に墓が並存する状況が判断され、屋敷墓かと推定される。

また、トレンチ北側の石見条里北界線を集落の道路とすると、そこから集落南端の柵列まで20m弱しかないので、ここに道路は想定できない可能性が高く、石見条里の成立が問題となる。1区の調査成果では13世紀の後半に現在の水田景観が成立したことが判り、この成果が2区まで普遍化できるとすると、集落はそれ以前の景観を伝えているものと考えられる。

**長岡京期** 西京極に近接した地点での調査であったが、一条条間南小路両側溝の検出は大きな成果であった。この小路は左京では1箇所しか発見されていないが、その座標と比べるとほぼ同一数値であることが判り、丘陵を越えて正確に測量が行われたことが知られる。

側溝の構造は南側溝が2時期の変遷はあるが、その幅や深さなど、規模が一定であるのに対し、北側溝はトレンチ内でも異なり、北側から直角に流れ込む溝が存在するなど、整地をして排水を行った段階で放棄された、宅地開発の初期的な状況を示しているものとみられる。

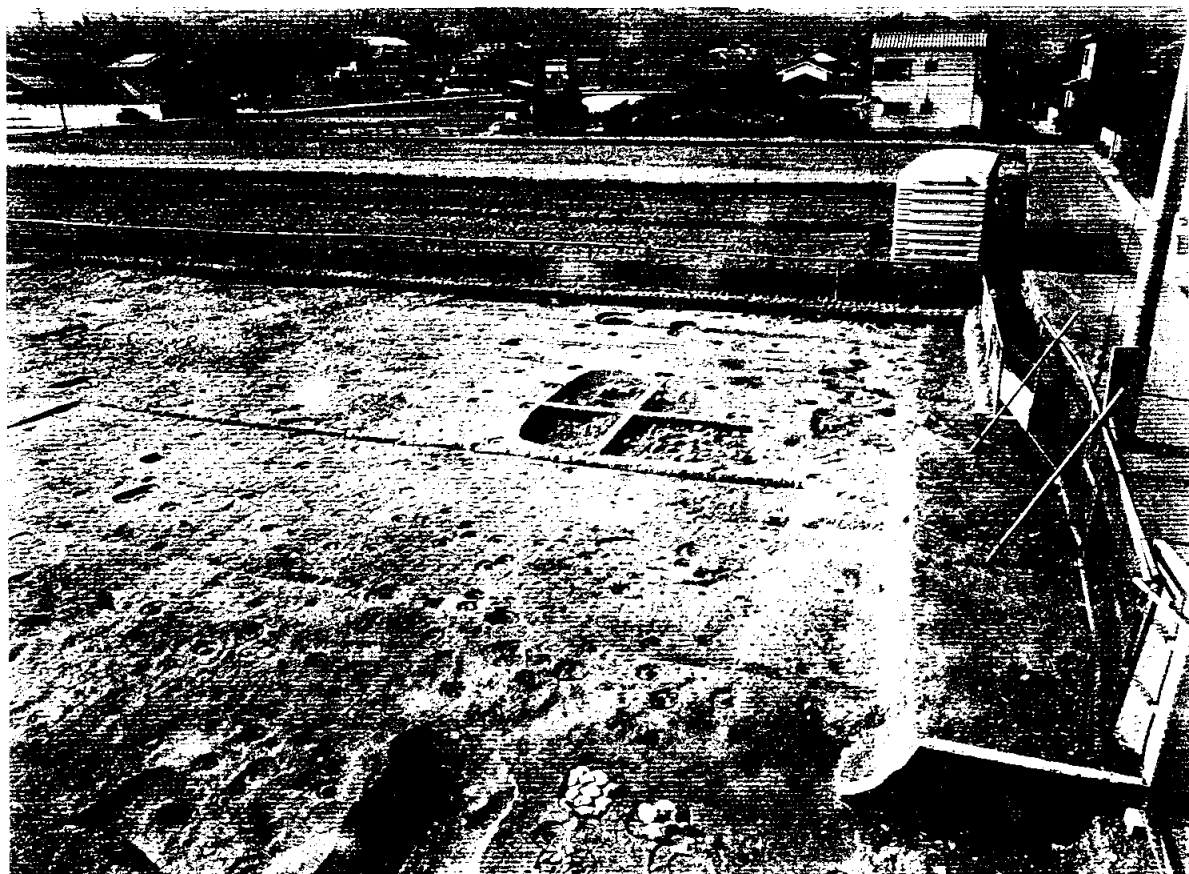
短期間の都（784～794年）であった長岡京の完成度については、調査を重ねるごとに各地で遺構が検出され、ほぼ完成されていたことがわかってきた。西京極に近接する地点で、かつ小盆地的な景観を有する大原野での発見は、当地では西京極にいたるまで完成されていたことを実証したものであるが、建物が存在しないなど、建設途上であったことがうかがえる。



土壙563遺物出土状態（北から）



溝543遺物出土状態（北から）



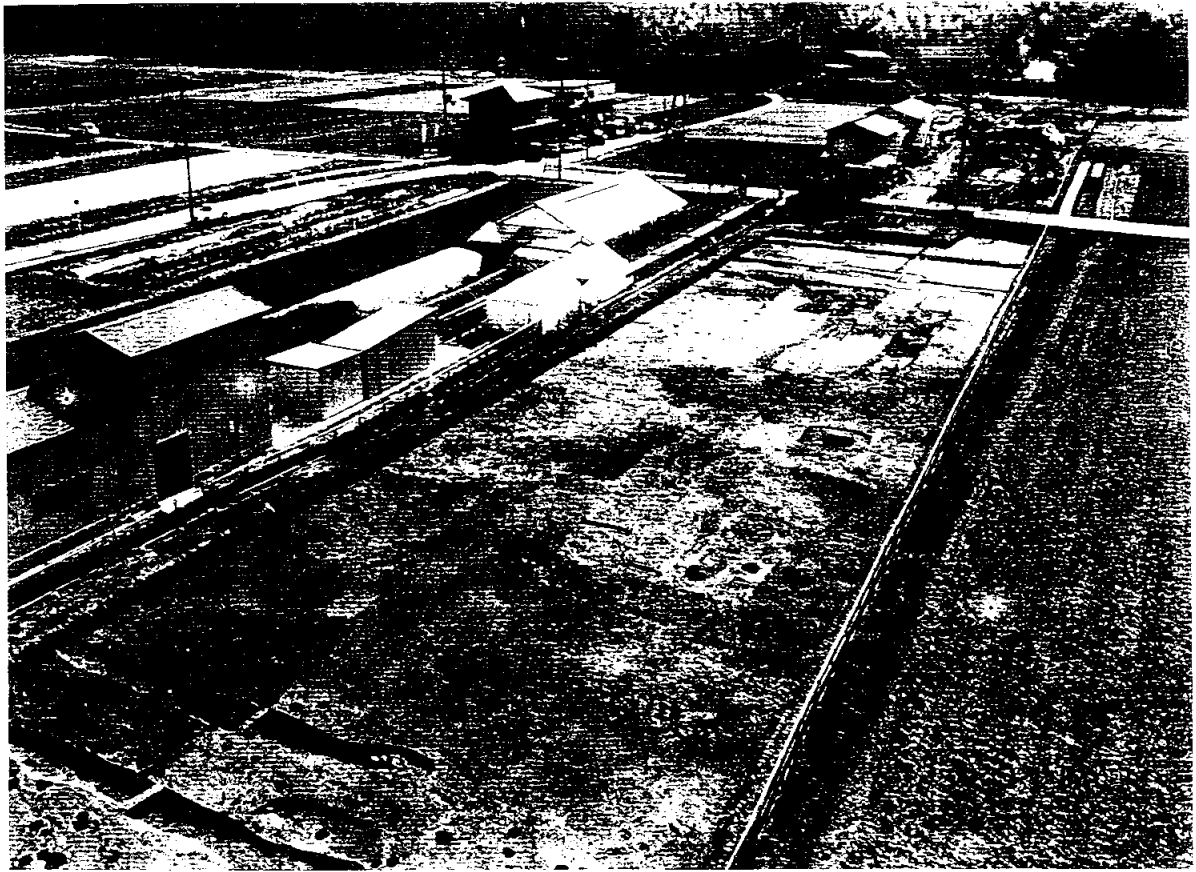
中世遺構全景写真（東から）



土壇037（西から）



上壇486（東から）



長岡京期遺構全景（北から）



一条条間南小路（西から）



土壙563全景（北から）